

## オオサンショウウオの健康管理と寄生虫保有状況の把握<sup>(198-200)</sup>

浅川満彦〈酪農学園大学〉

COVID-19に関わる数多報道のおかげで、もはや、不顕性感染という語が一般の常識となった。念のために記すが、コロナウイルスに感染をしても、症状を出さない状態を意味する。これは寄生虫の感染でも同様である。飼育動物では、温度や餌などが急変した場合、重篤な急性寄生虫病を発症することが知られる。このような危険性は安佐動物公園で飼育されるオオサンショウウオでも同様であるという前提から、私たちは同園スタッフと共同で寄生虫の保有状況を検査し、結果を随時公表した。

生きている個体では、その糞便を調べることで、消化管に寄生する原虫のバランチジウム（繊毛虫類）やコクシジウム（胞子虫類）の寄生が間接的に確認された。また、線虫卵も見つかったが、この方法は確実ではない。寄生している線虫がどちらかの性に偏った場合、あるいは、未成熟の場合は、当然、寄生はしていても虫卵は産生されないからだ。

そこで、不幸にして死亡した個体から、直接、寄生虫を見つける方法の併用が確実である。安佐動物公園では、1992年から2015年に斃死したオオサンショウウオ129個体分の消化管が保管されていた。このような材料が保管されていること自体、研究や保全にも寄与することが求められる動物園の鑑といえる。これらを1つ1つ丁寧に実体顕微鏡下で調べさせて頂くと、虫卵ではその寄生が示唆された線虫 *Amphibiocapillaria tritonispunctati* の他、吸虫 *Liolope copulans* と線虫 *Megalobatrachonema nipponicum* などの保有状況が詳らかになった。こ



図7-17. 飼育個体の体表に寄生したオオアタマビルと病変部位

れらが濃厚感染したような状態では、何らかのストレスが引き金となり、消化器疾患の原因になることは心得ておきたい。

一方、体表にはオオアタマビル（環形動物）が寄生していたことも判明した（図7-17）。吸血による貧血や原虫トリパノゾーマ類（鞭毛虫類）伝播の直接的な病害に加え、吸血痕から細菌やミズカビ類（真菌）などが侵入する門戸を形成する危険性もある。このように寄生虫には別の病原体を誘引する場合もあり、日頃の注意深い個体観察が必須となる。